

『最後まで愛し通された』 ヨハネ13:1-11

13:1 過越の祭の前に、イエスは、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時がきたことを知り、世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された。

13:2 夕食のとき、悪魔はすでにシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを裏切ろうとする思いを入れていたが、

13:3 イエスは、父がすべてのものを自分の手にお与えになったこと、また、自分は神から出てきて、神にかえろうとしていることを思い、

13:4 夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいをとって腰に巻き、

13:5 それから水をたらいに入れて、弟子たちの足を洗い、腰に巻いた手ぬぐいでふき始められた。

13:6 こうして、シモン・ペテロの番になった。すると彼はイエスに、「主よ、あなたがわたしの足をお洗いになるのですか」と言った。

13:7 イエスは彼に答えて言われた、「わたしのしていることは今あなたにはわからないが、あとでわかるようになるだろう」。

13:8 ペテロはイエスに言った、「わたしの足を決して洗わないで下さい」。イエスは彼に答えられた、「もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとなんの係わりもなくなる」。

13:9 シモン・ペテロはイエスに言った、「主よ、では、足だけではなく、どうぞ、手も頭も」。

13:10 イエスは彼に言われた、「すでにからだを洗った者は、足のほかは洗う必要がない。全身がきれいなのだから。あなたがたはきれいなのだ。しかし、みんながそうなのではない」。

13:11 イエスは自分を裏切る者を知っておられた。それで、「みんながきれいなのではない」と言われたのである。

●本論

当時のことですが、足を洗う。それほど汚れているのなら、誰かにやってもらえばいい、…ということではありませんでした。イエスさまが立ち上がって、弟子たち一人一人の足をとって洗って下さった…、それが今日、見ている物語の情景です。

その様子のすべてを貫くイエス様の思いがまず記されています。

13:1 過越の祭の前に、イエスは、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時がきたことを知り、世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された。

イエスさまの愛がここからの物語の中心にある。そしてこの全ての行為の理由となっている。そのことを覚えつつ読んでまいりましょう。

●本論

I. 自分の時を知って

あらためて、この福音書の記者ヨハネは、イエスさまが「ご自分の時がきたことを知った」ことをきっかけに13章以降の物語や言葉を描き出しています。

実際に、その夜にイエスは、祈りに出ていったオリブ山でとらえられ、そして不当な裁きにかけられた後、次の日には十字架にかけられて行くという顛末をたどりま

す。
「その時」について、

「イエスは、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時がきたことを知り、…」（:1）と表現しています。

同様の表現は、弟子たちの足を洗うために立ち上がるイエス様を語る際にも

「また、自分は神から出てきて、神に帰ろうとしていることを思い、」（:3）と、イエスさまの思いを表しているのです。

キリスト教用語としての「昇天」と「召天」の違いをご存知かと思えます。

読みは同じですが、「昇天」は復活のキリストが天に帰られた出来事であり、「召天」は、クリスチャンが「天に召される」、つまり神さまのもとに召される、帰るという意味ですね。

「天に召される」という信仰の言葉。なくなって終わってしまうのではなく、髪のみもとで安息を得る、そういう慰めがあるからです。

ここでヨハネは、イエスさまが十字架の苦悩を知っておられることをよくよくご存知の上で、その先にある「父のみもとに行くべきとき」をイエスさまの「ご自分のとき」として、表しているのです。

イエスさまがただ十字架しか見ていないのではない、その先を見ていた。ここにわたしたちも思いを重ねていくとき、自然、クリスチャンの死、自分の死について、希望と慰めをイエス様と共有できます。

つまりイエス様は、そうして、この残された時間をもって「この上なく愛しぬかれた」（新共同訳）のだということです。

イエスさまのしているもののぞみがあると、わたしたちも残された時間でどのように生きるべきか、わかるようになる…のではないのでしょうか。

Ⅱ. 裏切りが進行する中で

この13章のはじめから、イエスさまの愛のありさまとともに、並行するかのよう「裏切り」の物語が語られています。

悔しいながら、当時、それに気づけなかった弟子たちの一人ヨハネが、イエスさまの言葉を聖霊による気づきをもって振り返って記しているのです。

13:2 夕食のとき、悪魔はすでにシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを裏切ろうとする思いを入れていたが、

そして今日お読みした最後の方には、

13:11 イエスは自分を裏切る者を知っておられた。それで、「みんながきれいなのではない」と言われたのである。

イエスさまは、すべて知っておられたのだ…ということ、ここで書き記しています。そして、それを知りながらも、イエスさまがその愛を、そこにいる弟子たち皆に「残るところなく示された」（新改訳）というのです。

イエスさまは、イスカリオテのユダの裏切りを知りながらも、彼を排除しませんでし

た。
 その場にある裏切りや裏切る者をも、イエスさまは、その愛の中に置かれたので
 す。。

これが、同じく神さまの愛のありさまで。何度も確認します。

ヨハネ3:16 神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。
 そして先週お読みしたイエスさまの言葉をもう一度確認しておきましょう。

12:47 たとい、わたしの言うことを聞いてそれを守らない人があっても、わ
 たしはその人をさばかない。わたしがきたのは、この世をさばくためではな
 く、この世を救うためである。

イエスさまは、この世を裁かないと言われました。むしろ愛し尽くされたのです。

Ⅲ. 最も低いありさまで

13:6 こうして、シモン・ペテロの番になった。すると彼はイエスに、「主
 よ、あなたがわたしの足をお洗いになるのですか」と言った。

おそらく他の弟子たちも少なからずペテロのような戸惑いがあったことと思います。

13:7 イエスは彼に答えて言われた、「わたしのしていることは今あなたに
 はわからないが、あとでわかるようになるだろう」。

「今わからないが、あとでわかるようになる」。その境にある出来事は、イエスさま
 が十字架で死なれたこと。三日目によみがえられたことを知ったあと。そして、ペン
 テコステの経験をしたあとであろう…と、今のわたしたちにはわかります。けれども
 当時のペテロを始めとした弟子たちにはわからないことでした。だから…

13:8 ペテロはイエスに言った、「わたしの足を決して洗わないで下さい」。
 イエスは彼に答えられた、「もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あな
 たはわたしとなんの係わりもなくなる」。

ペテロの応答は、断固とした拒否でした。それはおそらく弟子としての自負が働い
 たのかと思います。けれどもそれに対してイエス様は、もし洗わないなら、ご自分
 となんの係わりもなくなると言われたのだから、ペテロは動揺しました。

ここまでで一旦整理しましょう。足を洗うという行為は何だったか…ということ。
 それは、「仕える者」の模範となったという…以上の意味があります。

それがイエスさまの十字架の死を通して、人の罪のすべてを洗うことを表す。

そしてそれをすなおに受け入れる人こそが、ゆるしを受け取る人、神の子とされ
 る人なのです。それが救いであり、つまりイエス様との係わりがあるのです。

ペテロは、それまでの経験で、イエス様との関わりに自信を持っていました。

イエスさまに声をかけていただいて、すべてを捨ててイエスさまについていきました。
 その後、いつもイエスさまについていき、その教えをだれよりも最前列で聞き、
 その御業をそばで目撃し、そしてイエスさまのためにだれよりも献身的に働いてき
 ました。

彼の中で、イエスさまとの係わりは、どれほど自分が弟子として頑張ってきたか
 …という物語となっていました。

そんな彼に、イエスさまは「もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわた

しとなんの係わりもなくなる」と言われたのです。

肝心なことは、主イエスに足を洗っていただく。自分の一番よごれている所をイエスさまに洗っていただくということです。

それが、すなわちイエスさまの十字架の救いの業でした。

このことがペテロや弟子たちにとって本当の意味でわかるのは、十字架のイエス様から離れさり、逃げ出した経験をしたあとのことです。自分の弱さ、罪深さを知らされたからです。そうして、復活のイエスさまと出会って、ゆるしを経験していくのです。

「何ができて、できなくても…ただ愛されている」と経験したのです。

ですから、今日の結論は、わたしたちもこのイエスさまの救いをただ素直に受け取ることがこそが大切だということです。そこにイエスさまとの関わりが生まれるのです。

○さいごに

13:1 過越の祭の前に、イエスは、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時がきたことを知り、世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された。

イエスさまのこの地上で残された時間のすべてを、弟子たちを。そしてその視界には、わたしたちをも覚えて愛して愛しぬいてくださいました。

愛の限りを尽くしてあの苦しみに満ちた十字架を受けとってくださったのです。

時々わたしは自分の最後の日を想像することがあります。

この一日を最後というその最後の瞬間まで、わたしは何を思い、どんなふうに生きることができるだろうか…と。

「イエスさまありがとう」「みんなありがとう」と言えるのか？ もしかしたら自分のことさえわからなくなっているかもしれない…、そんなことを想像することもあります。おそらく確実に一番弱くなる自分、情けない自分だろうと思います。そんな最後の自分のありさまがどのようなものであれ、イエスさまが、またその言葉が、わたしを支えてくださることを想像して覚えているのです。

「…世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された。」

そのまなざしの中に、弱くなりきったわたしをもおいてくださっていると。

わたしは、そこで何もできなくなっても、自分さえわからなくなっていたとしても、ただ愛されて神の子としてみもとに迎えていただけるのです。

そうして今、大切なことは、イエスさまがわたしの足を洗ってくださるその愛を、ただ素直に受け取ることだけなのだとわかるのです。

「イエスさま、心から申し上げます。ありがとうございます」と。

みなさんも、そういう希望を頂いているのです。